

## Stephen Crane —ジャーナリズムの中の文学世界—

岡 林 稔

Stephen Crane

—His Literary World in the American Journalism—

by

Minoru Okabayashi

クレーンとジャーナリズムの関係は多くのアメリカの作家の例に漏れず大変深く密接であるが、わけてもクレーンが文筆活動を行った1890年代は読者獲得競争の熾烈な戦いのさなかであり、その渦中においてクレーンはどの時代の作家よりもその意味でジャーナリズムに強い影響を受けたものと言っても良い。今回は1880年代から1890年代にかけての、際立ったジャーナリズムの傾向としてのセンセーショナルな部分からクレーンの文学を論じてみる。そもそもセンセーショナルなものは、Frank Luther Mott の定義によると、「平均的読者の異常な情緒反応を刺激する記事およびその手法」を言うものであるが、この時代には「セックス、スキャンダル、汚職そして奇形の詳細に互る新聞的取り扱い」<sup>1)</sup>と限定されて良いものである。こうした生々しい現実の暴露記事によって読者の関心を買ひ、ついには1セントまで下げた新聞代金の値下げ競争とともに、読者獲得競争の取材合戦から生まれたものであった。*World* の Pulitzer との戦いの中で、1896年 *Journal* の Hearst が、*World* の日曜版のスタッフを全員買い取り、人気の有った連載漫画“Yellow Kid”まで乗っ取ってしまった事から始まった、いわゆる“Yellow Journalism”の名において一層先鋭化した状況を呈し、最後にはスペイン・アメリカ戦争を扇動するに至ったとまで言われている<sup>2)</sup> ジャーナリズム旋風だったのである。クレーンジャーナリズムに於けるこのセンセーショナルな部分との協調およびその後の離反のプロセスを見て行くことによって、19世紀末の一人のアメリカ作家の生き方にも光をあててみたい。

クレーンジャーナリズムでの経歴は、その活躍の舞台によってはほぼ5期に分けることが出来る。<sup>3)</sup>

(1) 1890年から1892年に至る無署名レポーター時代は兄 Townley の New Jersey Coast News Bureau における地方通信員としての、いわば学生レポーターの身分での駆け出しの時代である。リゾート地 Asbury Park では華やかな避暑客の様子をレポートし (“Crowding Into Asbury Park”, July, 1892),<sup>4)</sup> Ocean Grove においては、よく宗教的な集会の開かれる土地柄をととも少年とは思われない筆写でローカルニュースとして仕上げ (“Meeting Begun at Ocean Grove” July 2, 1892), 夏季大学講座が催されている Avon-by-the-Sea では、Howells や Garland の講演筆記風の記事まで書いている (“Howells Discussed at Avon-by-the-Sea”, Aug. 18, 1891)。Garland とはキャッチボールなどして有名作家との関係をもつことも出来た時代であった。アイロニカルな視点はすでにその骨格をなしているが、比較的無心に書くことを楽しむことが出来た時代である。この時期に既に “The Sullivan County Sketches” (1892) は発表されその作家としての才能はすでに芽を出し始めている。

しかしこの時期にクレーンが無署名ながら書いた、“Parades and Entertainment”, (Aug. 21,

1892)は筆禍事件としてクレーンにジャーナリストとして苦い試練を受けさせることになる。Junior Order of United American Mechanics のパレードの様子は、そのぶざまな工員たちの格好が実に辛辣に描かれ、アメリカの労働者の名誉を著しく傷付けるものとして、ライバル紙の告発や読者からの非難の手紙のために、掲載紙 *Tribune* は窮地に追い込まれる。しかも運悪く *Tribune* の経営者 Whitelaw Reid は Harrison 大統領候補とともに Republican の副大統領候補として折から選挙キャンペーン中であった。この事件でクレーンが解雇されたという記録はないが、筆禍事件に巻き込まれたクレーンは大いに嫌気がさしたのであろうか、4日後の手紙で、<sup>5)</sup> もっと大きなスケールで人間の姿を見たいと、3年後に実現する西部行きを決意するのであった。

(2) 1892年の秋から1894年の時代は、“An Omnibus Baby”(May, 1894)などのスラム街探訪によるスケッチを初めとして、“An Experiment in Misery”(April 22, 1894)、“Men in the Storm”(Oct., 1894)などの“city sketch writer”の時代で、後で触れる“In the Depth of a Coal Mine”(Aug., 1894)のような、都市の困窮者の実態の関心ばかりではなく、鉱山労働者の苛酷な労働条件への“crusading spirit”を備えた社会派的傾向が比較的多く見える時代である。代表作となる *Maggie*, は Johnston Smith のペンネームで出版され(1893)、*The Red Badge of Courage* (以下 *Red Badge* と記す)も抄略版で雑誌に掲載されるが、まだ世間からは正当な評価を受けるに至っていない。

(3) 1895年の1月から5月に至る West・Mexico 旅行は、クレーンの将来性に目を付けた Bachelier Syndicate の、いわゆる“feature writer”として派遣されたもので“Nebraska’s Bitter Fight For Life”(Feb., 1895)のような記事に見られる、「自然対人間」の視点が本格的に見えて来る時期でもあり、この取材旅行によって“The Blue Hotel”などの数々の Western Tale が生れることになる。この年の秋、10月 *Red Badge* が Appleton, Heineman で出版され、クレーンは一躍時の人となる。特に英国本国での高い評価が若きクレーンをスターダムにのしあげ、12月には Hubbard によって“the Philistine Society Banquet”がわざわざ彼のために催されるまでに至った。

(4) 1896年は、*Red Badge* の成功に目を付けた McClure との月給による執筆契約まで結ぶが、「南北戦争もの」を書かせようとする McClure の希望に添うことが出来ず、むしろ Howells への社会派作家としての忠誠に殉じる形で、その興味を専ら都会生活に向けることになる。New York の歓楽街、警察回りのレポーター時代で、*New York Journal* を主な発表誌として“Opium’s Varied Dream”(May 17, 1896)、“Adventures of a Novelist”(Sep. 20, 1896)などの記事が書かれた時代で、“Series of Life New York”と銘打って「実話小説もの」を書かせる Hearst のセンセーショナルリズムが大いに影響を受けた時代である。有名な Dora Clark 事件が起きたのもこの時期である。

(5) 前の年の事件から足を洗う恰好の契約が Bachelier から入ったこともあって、1897年の初めから1898年11月まではいわゆる従軍記者の時代に入るが、(a)キューバ密航の試みと遭難(1897年1月)(b)ギリシャ・トルコ戦争特派員(1897年4—5月)(c)スペイン・アメリカ戦争特派員(1898年4—11月)の3時期によるものである。それぞれ“The Open Boat”(June, 1897)、“Death and the Child”(March, 1898)、“Active Service”(Oct., 1899)そして“The Upturnd Face”(March, 1900)、“Wounds in the Rain”(Oct., 1900)に収められた数々の作品が生まれる戦争実体験の時代でもある。

こうしてクレーンのジャーナリストとしての経歴を概観してみると、改めてジャーナリズムとク

レーンの文学の世界の深い結び付きに目を奪われるが、これはある意味ではとにかくクレーンも新聞・雑誌からの収入によってその大部分の生活費を得ていた、当時の作家の一般的な姿と言っても良い。好評を博した *Red Badge* に関して、Bacheller Syndicate には僅か90ドルで売ったもの<sup>6)</sup>であったし、その最終版は Appleton に渡され、1896年9月までには9版を重ね、その10%の印税はかなり手元に入ったはずだが、ジャーナリズムの仕事を通り作家として創作に専念出来る程のものではなかった。英国での出版に関して、相当売れたにもかかわらず、クレーンが受け取った120ドルは印税という性質のものより、ボーナスとして貰ったものでしかなかったと言われている。<sup>7)</sup>作家としての実力も身につけ作家としての自立を夢見ながらも、クレーンは結局、原稿料や印税よりも新聞社からあるいはシンジケートからの手当によって生活して行くほかなかったのである。シンジケート制度は数多くの新聞紙上での発表があったとしても、その利潤は作家よりもシンジケート入ることの多い制度であった。しかし文学を志す若者にとって、当時のジャーナリズムは、我が国における文学同人誌のような新人の登竜門としての機能を果たしていた側面もある訳で、第1期の Port Jervis や Asbury Park でのレポートがアメリカ文学の伝統の一つであるスケッチ風のものであり、その方向の中で“*The Sullivan County Sketches*”のような作品の成立が見られた事実も見逃せない。Irving 以来ジャーナリズムを発表の舞台としたスケッチというジャンルが文学作品として成立して来た歴史的背景や、クレーン自身においてもこうしたスケッチのモンタージュが小説作品となって行く<sup>8)</sup>ことを思えば、いよいよクレーンとジャーナリズムの関係は深い密接なものであったと考えなければならない。

クレーンジャーナリズムに於ける経歴は伝記的側面から見ると必ずしも親密な関係にあったのではなく、何度かジャーナリズムとの間に衝突や抗争を繰り返していたことが伺われるが、しかし、上の経歴からも分かるように、決定的な決別はなかった。従って生活面においても文学的成功の足掛かりとしても生涯ジャーナリズムへの依存関係は継続されていた訳だが、そのなかでジャーナリズムへの埋没とそのための自己嫌悪、および積極的離反の兆候はクレーン文学の内実を語る貴重な検証の対象ともなっている。

例えば第1期における筆禍事件は、単に若きクレーンをして南部や西部の広い世界に羽ばたかせる楽観的未来を招来し、そして結果としても数々の傑作を生む事によって、幸運な展開を見ることとなったが、第2期の、具体的には“*An Experiment in Misery*”と“*In the Depth of a Coal Mine*”の記事にかかわる問題はクレーン文学の世界をかなり必然的に運命付けて行ったように思われる。これらの記事は将来クレーンが社会派作家として大成することになれば、まさにターニングポイントとしての重要な意味をもつものとして評価されることになったはずである。前者に関しては、1890年代の社会不安の凝縮された形で描かれた浮浪者の姿は社会組織の矛盾の恰好の現象であった訳だから、当然社会派作家としての観点からの取り扱いが予想されるはずだし、ジャーナリズムの側にも社会改善の“*crusading spirit*”があったことは Pulitzer のモットー<sup>8)</sup>からも伺える。しかしこの時期、「社会主義」というイデオロギーの裏付けは、ジャーナリズムの経営陣の回避するところであり、クレーンにおいてもまだそうした明確な姿勢は身についてはいなかったのではないかと思われる。

例えば *Maggie* の一般的な評価としても Brand Matthew 教授のように“*local color*”の作品として見る向きもあったことは事実だし<sup>9)</sup>、クレーンが評価を求めてその処女作を送った Forum の副編集長 Barry の「改革への情熱過多は危険思想の傾向あり」(*Correspondence*, No.18)<sup>10)</sup>といった意見があったことは、重要な当時の社会的情勢と見なければならない。また Hamlin Garland を

はじめとする社会改善派の作家に送った *Maggie* の署名には「この世において環境は絶対的なものであり、しばしば冷酷に人生を決定する」と、いずれも同じ文面で書かれ<sup>11)</sup>、自然主義作家的な社会改派としての意識があったことは事実である。結局 Barry にしても「生一本な改善への感傷的な訴え」である側面が当時の文壇にはそぐはないものとした評価を下したものであり、*Maggie* の不評もあって、クレーンは社会改善派としての情熱を、むしろジャーナリズムの世界で展開して行くことになった。実際、クレーンは *Maggie* の上梓を誇らしげに年上の女性 Munore に伝える手紙の中で、Hamlin Garland に社会改善の記事やスーリーを書かせて、社会改善派の雑誌としての評価の高かった *Arena* の編集長 Benjamin Orange Flower が今後の自分の書くものの出版に関してはずっと便宜を図ってくれるはずだと伝えている。(No.27) これは *Maggie* が“crusading spirit”を意識してかかれたものであることを示し、その意志は *George's Mother* において更に推進されることになるが、Barry などの意見によって代表される出版界の事情はそうした社会派の小説の時期尚早論をとり、*Arena* さえもクレーンに *Maggie* の再版を約束しながら結局はそれを実現していない。<sup>12)</sup> クレーンはむしろそれらの方向性をジャーナリズムの中で推し進めて行くことになる。しかしながら、皮肉なことに、思いがけない *Red Badge* の成功がそうした社会派小説とは別の方向性をクレーンに与えることになった。

しかし *Maggie* や *George's Mother* の作品化において現れている Bowery の現実に対するクレーンの社会正義発動の思想は一貫したバックボーンとなっていたわけであり、ここで問題としなければいけないのは、その社会の現実をどう捕らえ、どう社会に訴えて行くかの、言わば方法論の問題である。ここではその方法が、自然主義の影響下にあったアメリカ・リアリズム文学の発展の線上とは別に、当時のジャーナリズムの強い影響力があった事実注目してみたい。“An Omnibus Baby” (1893年執筆)<sup>13)</sup> は明らかに *Arena* の編集長 Flower の“crusading spirit”に適うものとして *Maggie* 出版の直後に書かれたもので、中でもセンセーショナルな極めて積極的な同調を示しているスケッチ“A Dark Brown Dog” (1893年執筆)<sup>14)</sup> は、クレーンの社会悪告発の最も基本的なスタイルを示しているものである。Tommy を主人公とした“An Omnibus Baby”の一連のスケッチの第3作であるが、スラム社会の悲惨な現実が小さな子供の姿を通して描かれる。飲んだくれた父親の、無抵抗な子犬への虐待は、いたいけな子供の無二の親友とも言うべき子犬の死に対する感傷と、物質的繁栄からも精神的幸福からも見放されたと思像される酒飲みの父親が、その子犬をコーヒーポットで殴りつけ、足で蹴飛ばし、さらに窓から投げ捨てる惨たらしさによって、その異常ぶりを強調したセンセーショナルな色調の極めて濃い現実把握の方法である。クレーンにしてみれば、その異常さを強調することで社会悪を許す社会の心臓をとらえた実感をもって描いたのかもしれない。「犯罪やスキャンダルの告発は社会改善の精神に則ったものであり、この改善運動はしばしばセンセーショナルになった」<sup>15)</sup> という当時のジャーナリズムの典型でもあった。

社会的な分析に基づいた現実把握はクレーンの方法には見えず、こうした都会生活のスケッチの多くは、感傷に訴えたり、クレーン特有のアイロニカルな視点で捕らえられることが多く、“An Experiment in Misery” (1894) においても、浮浪者の指定席とも言うべきベンチに腰掛けてすっかり浮浪者になりきった「若者」は、町に行く裕福な人々を見ながらの結論で終わっている。

“They expressed to the young man his infinite distance from all that he valued. Social position, comfort, the pleasure of living, were unconquerable kingdom.”<sup>16)</sup>

浮浪者のおかれた現実はその鋭い感覚で如実に把握され、貧富の差がいかにともしがたい宿命のごとく実感をもって語られるが、それには社会改善派としての視点はなく、もとより「資本家に搾取されている貧民」という社会主義思想の観点はない。

むしろこれらのスケッチは、「社会の不正に対する強い自意識」<sup>17)</sup>で書かれたもの、Boweryの人々の精神的弱さに原因を求めようとした意図があったこと<sup>18)</sup>、そして何より“*I was a socialist for two weeks.*”というクレーン自身の態度<sup>19)</sup>から評価するのが妥当だろう。A. Kazinの「私は多くのアメリカ人がクリスチャンであると同様に社会主義者であった。私は常に社会主義者の気分で生活していた」<sup>20)</sup>という1930年代の述懐と比較してみても、甚だ示唆に富んだ1890年代の比較的恵まれた1青年の一般的な姿であったのではないだろうか。「政治的理由よりもむしろ、道徳的、宗教的理由で社会主義に固執する、一種のピューリタンの理想主義」<sup>21)</sup>の傾向が強く、まだこの時代においては作家やジャーナリズムが責めているのは、資本主義というよりは、その社会のスキャンダル、性的退廃、汚職、非衛生だったのである。たとえばこの1週間後に書かれた同類の“*An Experiment in Luxury*” (1894)の結論においても、裕福な階級の人々の視点で、夜のスラム街から聞こえて来る絶望の啜り泣きや怒りの声には、金があることが幸せであるとは限らないというピューリタニズムのモラルを持ち出し、最終的には、社会の不平等の原因の責任者を特定出来ないでいる<sup>22)</sup>。クレーンには社会主義者の意識よりも、むしろあくまでジャーナリズムの探訪記事の基盤に則った、センセーショナルな独特の現実把握の方法に埋没している時期といえよう。

こうしたクレーンの文学とジャーナリズムの密接な関連を最も端的に示すものとして、“*An Experiment in Misery*”に見える当時の一般的なジャーナリストの取材の在り方を見てみよう。

“You can tell nothing of it unless you are in that condition yourself. It is idle to speculate about it from this distance.”

“I suppose so,” said the young man, and then he added as from an inspiration: “I think I’ll try it. Rags and tatters, you know, a couple of dimes, and hungry, too, if possible. Perhaps I could discover his point of view or something near it.”

“Well, you might,” said the other, and from those words begins this veracious narrative of an experiment of misery.<sup>23)</sup>

これはこのスケッチの舞台裏を暴露したようなものであり、従って新聞記事としては蛇足であるがゆえに、New York Press 版以外では編集者から削除された部分であるが、図らずもこの時期の、目撃者の視点を更に対象に密着させるセンセーショナルな手法に染まったクレーンの現実把握の方法を物語っているものと言えよう。

“*The Open Boat*” (1897)において一つの頂点を極めた、その小説方法の根幹にあった現実経験の直接性を前面に出す文体は、元を正せばこうした探訪記事の取材方法から生まれたものかもしれない。これはクレーンがジャーナリズムの経歴の中で培った現実把握の方法が、彼の文体と不可分のものとなって行く過程を示しているように思える。徹底した登場人物の視点に限定したその小説の方法は、全知の神の立場を取る視点を避け、従って、社会の貧困の背景としての社会経済組織への関心および社会改革を目指す視点よりも、「登場人物が当然見たはずのものではなくて、実際に彼らが見たもの」<sup>24)</sup>を提示することであった。この登場人物の目に直接写った世界を映す方法

論は、この現場主義としての、センセーショナルリズムの執筆姿勢と酷似しているが、これは本来クレーンがジャーナリズムの経歴の中で身につけた文体として見るのが妥当であろう。“crusading”という名のもとに行われたこうした取材方法が当時の新聞記者の一般的傾向であったことは、Mottの次のコメントによって理解されよう。

「当時のジャーナリズム〔センセーショナルリズム〕の手法と雰囲気を示すために一つの報道のタイプの例としてあげられよう。病院や監獄や孤児収容所などに入る許可を得るためには、気の効いた勇敢な作家は、変装をしたり、許可証を手当り次第に手に入れたものである。そうしてその体験談をそうした施設の内幕の暴露記事としたのである。若いレポーターは男も女もそんな離れ業をやったのけたのである。」<sup>26)</sup>

1890年代のジャーナリズムを俯瞰すれば、「破れぼろぎれを纏い、10セントを2枚だけ手にした空腹の身の上」を実験したクレーンもこうした若いレポーターの一人であったことには違いないわけだが、しかし単なるセンセーショナルリズムの先鋒のレポーターであったとすれば、後の作家クレーンは生まれることもなかつただろう。「2週間だけ社会主義者だった」という言葉に偽りはなく、まだ若きクレーンには社会主義作家としての可能性も十二分に期待できた一面を別の探訪記事において示している。

既に大都会の浮浪者の中にもぐりこんだ幾つかの記事は、貧富の差に於ける社会矛盾の現象を、社会改善への展望は捕らえられないままにも、その「社会の不正に対する強い自意識」によって捕えているし、めったに常人は足を踏み入れることもない炭鉱の現場へ潜入して取材した“*In the Depth of a Coal Mine*” (1894) においては、条件さえ整えば、Upton Sinclair や John Steinbeck のような作家になれる要素を持ち合わせていたことが伺えるものである。実際このレポートは“*Homestead and Its Perilous Trade*” (*McClure's*, June 1894) という Garland の Carnegie の労働者階級の搾取を告発する暴露の記事に匹敵するものであつたかもしれない。

地中深く分け行って苛酷な労働条件の元で働く鉱山労働者を取材し、石炭殻を広い集めているまだ育ち盛りの少年を見て、この子たちの母親はどうしているのかしら、学校はどうなっているのかしら、そしてこの汚れた空気の中で肺の病気になるはしないかしら、と胸を痛める描写が続き、“*the ong-eared slave*” 「ラバ」の話は深い衝撃で読者をとらえる。ラバが数年間地下で働かされるのは当たり前で、そのラバが何年振りかで地上に出たときの様子、そして再び地下に引きずられていくときの様子は、ラバをわざわざ人間と読み替えなくても、奴隷のごとく労働者を搾取する企業の残酷さはおのずと伝わって来る。その辛辣な取材は最後に一挙に企業主の胸元まで迫るものだった。

例えばそうした苛酷な悲惨な坑内の模様を目撃した後の；

When I had studied mines and the miner's life underground and above ground, I wondered at many things but I could not induce myself to wonder why the miners strike and otherwise object to their lot.<sup>26)</sup>

こうした箇所や、石炭ブローカーたちの坑内見学の際に彼らが遭遇した送風機の故障と、九死に一生を得たその死ぬ思いの事故に関して、彼らにしてみれば坑夫たちの苦勞を知る「喜ばしい事件」とした次のような箇所；

I confess to a dark and sinful glee at the description of their pangs and their agonies. It seemed to me a partial and obscure vengeance.<sup>27)</sup>

これらは *McClure's* の編集によって削除された一部である。当時のジャーナリズムの“*crusading*”がこの程度であり、クレーンの「2週間だけ社会主義者であった」とするコメントも納得いく時代であったが、クレーンのこの事件に関する感想は「奴さんらは結局真実の話しなんか欲しくないんだ。いったい何のためにこの俺を送り込んだのか？」<sup>28)</sup>とあるだけで、クレーンはだからといって以後ジャーナリズムと袂を別つという訳にも行かなかった。

むしろ、ボロボロを纏い、僅かな金だけをポケットに忍ばせて「浮浪者」さながらの身の上で捕らえた現実体験を現実把握の中心に置く、「目撃者の視野」に徹する文学の世界への傾斜が運命付けられた時期と言えるかもしれない。資本家が労働者を搾取する社会の矛盾の背景を鋭くえぐる社会派としての追及にも限界があり、あくまで現場報告に徹し、解説抜きのセンセーショナルな記事を送るのみが許されたジャーナリストの境遇であった。また当時の社会にあってまだジャーナリズムを離れて、作家としての自立の道は切り開けない作家にとっては、良心を抑えて現実に挑まなければならない厳しい時代であったと言わねばならない。この年は10月に社会改善運動には比較的積極的な *Arena* に“*Men in the Storm*”を発表し、*Red Badge* の出版に奔走し、*George's Mother* を書き上げているが、ジャーナリズムから創作の世界への転身を本気で考えた手紙も証言も見あたらない。まず第1に経済的な基盤が整っていない、すぐにでも生活に行き詰まってしまう状況だったのである。

この時期のクレーンは、ピューリタニズムの伝統下の道徳的な正義感覚はあったとしても、社会改革を考えての、社会組織の矛盾への責任追及の姿勢は、ジャーナリズムの営業方針の前に、まだこの時代は2週間程しか続かない時代だったのだろうか。まだまだこの時期のクレーンはセンセーショナルな支配下において、社会に対する自意識は放擲し「事件目撃」に熱中する時代で、取材した現実からその意識に基づいた一つの作品を熟成する余裕はなかったのであろう。

“*The Open Boat*”に至るまでは、West・Mexico取材の比較的ジャーナリズムとしての有利な立場を生かした時期を除いて、ひたすら、この恣意的なジャーナリズムに拘わらざるを得ない生活状況の中で、現場主義というセンセーショナルな執筆姿勢によってその文体を確立する時代と見るのが妥当ではないか。

早魃と飢餓に喘ぐ *Nebraska* の農民の姿や、貧困の中で貧富の社会的原因を疑うことを知らずに黙々と生きているメキシコ原住民の生活に触れ、大きなスケールの自然と人間の対峙に深く感動して<sup>30)</sup>西部から帰ったクレーンは、再びセンセーショナルな先鋒としてニューヨークの大都会の中でその現場主義に立ち返って行くのである。

しかしその前にクレーンには一つの転機の生まれる可能性もないわけではなかった。西部・メキシコ取材旅行の途中も手をいれ続けた *Red Badge* の出版とその意外な反響がこの時期クレーンの心を揺るがせるのである。

*Red Badge* の反響にいち早く営業的触手を動かさせたのは、1896年から月給制度で契約を結び、戦記物を書かせようとした *McClure* であった。クレーンはこの *Red Badge* の成功の余勢を駆って、一躍戦記物語作家として文壇での地位を築き上げる可能性があったのである。しかし一方では、あくまで *Howells* への忠誠を誓うように、社会現実に根差したリアリズム文学への野心を捨て去ることは出来なかったクレーンであった。*Red Badge* も *The Black Riders* も出版され、また新たに *The Third Violet* も完成に近いクレーンは、1896年を迎えて文学的野心に内的充実を感じていた、ある意味では生涯最も希望に満ちた新年であったはずである。この年の1月1日、クレーンは文学の師 *William Dean Howells* に日本人のような律義さで年始の挨拶状を出している。

「あなたが私に示して下さい下さったご厚情をいつも留め置きながら、あなたへの感謝の気持をお伝えできないで心苦しく思っております。年頭に当たりあなたへの感謝の気持と、あなたの優しい慈愛に充ちた存在を常々私がいかに心に留めているかをお伝えしたいと思います」(No.168)

Howellsへのこの手紙は新人作家の文壇の大御所への単なるご機嫌伺いではなかった。自分の文学の方向が、あくまでこの大先生 Howellsによって認められた *Maggie* の延長線上にあることを、言わば年頭に当たって決意表明したものとと言える。この気持ちは Howells の1月26日付けの返信にある、「私にとっては、やはり *Maggie* への愛着捨て難いものがあります。 *Black Riders* や *Red Badge* などよりも優れたものです」(No.187) というこの Howells の言葉がその方向性を更に決定付けたように思える。この師の言葉に応えるように、翌日クレーンは、*Red Badge* の反響が自分が信じている真実追究の道から自らをそらせるものと心配し、そうした世間の風評に立ち向かう気持ちを伝えている (No.191)。*Red Badge* が前の年の秋にアメリカだけではなく英国でも出版されて好評を博しているものにもかかわらず、クレーンは社会派小説こそが自分の文学の進むべき道だと考えたにちがいない。

しかし McClure はいち早く *Red Badge* の文壇での高い評価とその売れ行きに目を付け、この年からは *McClure's* との月給制の契約がすでに発効していたのであった。クレーンはさっそく南北戦争の戦跡 Fredericksburg, Chancellorsville を取材し *The Little Regiment* の戦記ものを手掛けているが、この戦記物の執筆義務には当初から不満を齎しているのだ。Howells への返信を書いた同じ日に McClure に宛た手紙では、なにか戦記物以外のもので書くべきものがあったらすぐ知らせてくれとその気持ちを伝え、「あなたが私に何かテーマを見付け出してくれると有り難い。ついでながら、次に起こる大規模の電車会社のストライキを見たいものだ。そのときは *Red Badge* がつまらなく見えるようなものをきっと書くことが出来ると思う」(No.192) と、その本音を漏らしている。クレーンの気持ちは Howells への忠誠心の中で、例えば電車会社のストライキを取材しそこから社会派小説を書こうとする意志は明確に読み取れる。やがてこの年は、“*The Little Regiment*”, “*Three Miraculous Soldiers*” を義務的に *McClure's* に発表した後は、もっぱら New York の都市生活の探訪の記事に明け暮れることになるのである。

Bowery から Tenderloin<sup>31)</sup> に場所を変えたクレーンは、再びもう一人の *Maggie* を探しもとめて、New York の真っ只中に足を踏み入れていた。しかし *Jouranal* の Hearst が巻き起こした 1890年代の “Yellow Journalism” 旋風の名によって知られる、一層先鋭化して行ったこのセンセーショナルリズムの真っ只中に、自らその犠牲者となって身を投じることになるとは思ってもいなかったのである。クレーンがリアリズム文学への方向性を意図したとき Garland のように社会不安の現実の事実究明を目指していたことは McClure への先の手紙でも分かるが、McClure はクレーンにストライキ取材の指示を与えるということではなかった。せいぜい当時の New York の新名物であった Bicycle Speedway, や Broadway Cablecar を素材とした都市生活を小説家の筆で書かせたもので、深刻な社会現実に関するものとしては当時大きな社会問題となっていたアヘンの巢窟を探訪させるくらいであった。

しかし、自らアヘンを喫煙したその体験に基づいて書いたものと思われる、この “*Opium's Varied Dream*” (1896) はセンセーショナルリズムを売り物とするジャーナリズムの要請を正面から受け止めて書いた象徴的な記事であった。中国人によって持ち込まれたアヘンに関する、一般的な叙述の後に続く次のような文章は、実際アヘン喫煙体験がなければ書けないように迫真的である。



If he had swallowed a live chimney-sweep he could not feel more like dying. The room and everything in it whirls like the inside of an electric lightplant. There appears a thirst, a great thirst, and this thirst is so sinister and so misleading that if the novice drank spirits to satisfy it he would presenly be much worse. <sup>32)</sup>

さらにアヘンの喫煙用具一式や小さなランプにかざしながらの“cooking”の処方などを詳細に紹介するこの記事は、読者の異常な好奇心を刺激するセンセーショナルリズムそのものであった。クレーンが取材のためだとはいえ、実際にアヘンを喫煙したことは、Dora Clark 事件での家宅捜査で見付かったその用具一式からも想像されるし、「何が起こったかよりも、それがいかに見えたか」を主眼とする、現実体験に絵での優先権をおいた姿勢がここでも際立った形で見えている。「目撃者の視野」を前面に出す現実把握の方法がいっそう特徴的になっていると言えよう。これは常人には目撃出来ないような場面を読者に提供する、当時のジャーナリストの必須条件としての文体でもあった。クレーンの自身の中で展開して行った独自の現実把握の方法で、ジャーナリズムでの仕事において培われた一つのスタイルと言えるかもしれない。

いずれにしてもこうしたセンセーショナルリズムに同調したクレーンの取材はやがて犯罪、汚職の記事を取材すべく軽犯罪即決裁判所“police court”に出向き、Tenderloin を足繁く探訪することになるが、それはクレーンの目的とした社会的現実の最も集約的に凝縮された場所であると同時に、またセンセーショナルリズムになれた新聞読者を満足させる恰好の取材地でもあった。これらは *Journal* の Hearst が “Series of Life in New York” と銘打って、クレーンに「実話小説もの」を書かすべく探訪させた場所と一致するが、一般的に考えられているように、センセーショナルな Dora Clark 事件に目を付けた Hearst によってクレーンが引き込まれたばかりのものではない。“crusading”を目的とする記事がしばしばセンセーショナルなものになる時代というべきかもしれない。この事件に先立って “Asbury Park As Seen by S. Cranc”<sup>33)</sup> で Hearst とは接触があったし、クレーンが社会現実に基づいたリアリズムの小説を意図した時期であったことは、Dora Clark 事件5日前の H. R. Huxton<sup>34)</sup> からクレーンへの手紙によって明らかである。(No.277) この手紙では、クレーンによって書かれていた「現実に起こった New York の市民生活に関する事件」に基づいた短編小説が Huxton によって Hearst に売り込まれようとしていた事実がそれを物語っている。また「Market Police Court に行けば良い Tenderloin ものが書けるはずだ」とアドヴァイスも受けている。また事件の顛末に関して敵対することになった Theodore Roosevelt<sup>35)</sup> とのあいだにも7月20日 (No.257), 8月17日 (No.270) 付けの交信もあり、クレーンは自ら積極的な警察事件にかかわる Tenderloin 取材を行っていたと言える。

あくまでも、クレーンの Tenderloin 探訪は彼自身の文学的動機に基づいた行動であり、やがて *Western Tales* が West・Mexico 取材から生まれたように、クレーンはこの取材を作品化へのワンステップと考え、少なくともそのモニタージュからいくつかのスケッチは生まれる見込みはもっていたはずである。単に生活手段としてジャーナリズムにおける売文のための仕事だけではない部分があったものと思われる。この時期クレーンは頻繁に Howells と交信し、この文壇の大御所からは電車の時刻や乗り換えの指示までしてもらって海水浴を共にしている。(No.258) (No.268) その交友の中では文面にあるように、New York *World* の “New York Low Life in Fiction” が話題になったことだろうし、もう一人の文学の師 Hamlin Garland には7月「Roosevelt がくるから Lantern Club で食事をしよう」(No.259) と誘っている。Police Court 取材によって Howells

や Garland を裏切らない文学の世界を作り上げて行こうともするクレーンの姿は容易に浮かび上がって来るのである。第二の Maggie を求めてクレーンが Tenderloin を彷徨していたのは間違いなく、「free lance の仕事で生活を立てることは “hopeless work” だ」とぼやきながらも (No.241), Howells や Garland の期待に応える作品の成就を胸に抱いて、充実していた時代でもあったはずである。

しかし Dora Clark 事件を契機にクレーンの方向は少しずつ Tenderloin から離れて行くことになる。この事件の顛末は既に述べた<sup>36)</sup>ので繰り返さないが、取材のいきがかりから街娼の濡れ衣を着せられながら二人の女性を救うに至った事件は、後日談として、“Adventures of a Novelist” の記事によって自らの体験談が書かれたが、むしろ自らがセンセーショナルリズムの餌食になったものと言わねばならない。

クレーンは “brave as his heroes” と新聞に囃し立てられながら証人台に立ち、彼女は放免される。当時の事実としては、クレーンは事件後数々の新聞ダネにされ、時には不幸な女性を救った英雄として報道されたが、いつの時代の世間の噂の例に漏れず、むしろいかかわしい女性と深夜同席していたことのほうがセンセーショナルに伝えられる所となったのである。裁判の進行過程ではクレーンの住まいが家宅捜査されアヘン所持の嫌疑までかけられることもあったのである。単なる不運な事件というよりも、そんな事件に巻き込まれてもおかしくないほど取材対象に密着していたクレーンの、センセーショナルリズム作家たる一面を露呈している事件かもしれない。

事件後の *Journal* の仕事としては、(1) “The Tenderloin As Really Is” (Oct. 25, 1896), (2) “In the Tenderloin” (Nov. 1, 1896), (3) “Yen-Hock Bill and His Sweetheart” (Nov. 29, 1896) があるが、Howells に誓った文学の方向性とはかなり違ったトーンで彼自身も不満を覚えていたのではないと思われる。(1)は Hearst との契約に基づいた「New York Police と暗黒街」の最初のスケッチだが、深夜の Tenderloin のダンスホールでのパートナーを巡る喧嘩や、朝までもう一杯と飲み続ける若者達の乱れた生活がスケッチされ、(2)においては深夜のレストランでの客の話を盗み聞きしたスケッチでしかなく、(3)においても1894年に書かれたアヘン中毒者の末路を、その臨終の近いベッドで愛情を尽くし看病しようとする恋人の報われない、悲惨な姿を描いている。いずれも Tenderloin の雰囲気は醸し出されているものの、“An Experiment in Misery” のような社会派の意識は希薄で、彼らをそこに追いやった環境への視点は皆無である。事件の思わぬ展開で、Howells に誓ったクレーンの初志は崩れ去ったのかもしれない。

“In the ‘Tenderloin’ ” (Nov. 1, 1896) が発表された直後の11月4日にはすでに Jacksonville にいて<sup>36)</sup>、不法入国を覚悟でキューバ行きを伺っていたのである。Dora Clark 事件の悪夢から逃れたい気持ちもあっただろうし、自らの文学的成功を再び戦争に関する素材において意図したのであろうか。とにかくまだ見たこともない現実の戦場を見たいとするその気持ちは、取材の舞台を変えて再びジャーナリズムに身を投じさせることになる。結局クレーンは、Tenderloin ものの創作に専念する事もできず、従ってジャーナリズムから決別するには至らず、依然としてジャーナリズムに連なる仕事を続けることになる。

キューバ行きは、West・Mexico 取材の時と同じように Bachelier Syndicate からの特派の形で、金貨で \$700 を前金として貰った<sup>37)</sup>取材であった。またしても生活の糧を得る手段としてジャーナリズムに拘わったわけだが、「新聞のためにレポートをするが、自らのために戦争がどんなものか想像するための」取材目的もあったとされる<sup>38)</sup>わけで、ジャーナリズムとの拘わりなしには文学的な成功は望めない時代であった。しかし、さすがにこの時期になると文学の成功のためにジ

ジャーナリズムの仕事の種類を選んだ新しい兆しが見えている。

キューバ渡航は *Commodore* の沈没のために失敗するはめになり、この体験は“*The Open Boat*”を生むことになった不幸な事件であったが、クレーンには *Dora Clark* 事件のような後味の悪さはない。それどころが希有の作品が書けた予期せぬ成果を齎した。この作品においては、直接体験を前面に出すセンセーションナリズムの手法に文学的「印象派」の手法を加味させた文体を完成させることも出来た。<sup>39)</sup> また、いつものように傍観者、観察者としての立場ではなく、その当初の目的はともかく、自分自身が事件に巻き込まれた一人の人間として、死に直面した生の苦悩と自ら格闘した、言いわば現実存在の主人公となれた体験が、今までの「傍観者」としてのジャーナリストの立場をひどく不毛なものに思わせたのではないか。「作家は人生に密着すればするほど偉大な芸術家になれる」<sup>40)</sup> という、自らの文学の理念に即した実践のなかで、なによりも傍観者としてのレポーターの域を越えて、自らの生命を賭した「行為者」としての事件体験の重要性が実感されたはずである。次のステップとしての、「新聞記者」から「兵士」への願望が生まれる土壌はすでに整っていたのである。

折からヨーロッパにあってはクレタを取り巻く紛争がくすぶり始め、引き寄せられるようにクレーンは初めてヨーロッパ行きを敢行する。

トルコからの支配をはねのけて独立せんとするクレタの動きは、1897年の反乱となって何度目かの独立を目指す、ギリシアの支援なしにはそれは望むべくもない状況にあった。クレタのトルコからの独立は単にギリシアばかりではなく、ヨーロッパのキリスト教国からの熱烈な支援を受け、いわば全ヨーロッパを巻き込むイスラム教国への情動的な憎しみが背景としてあった。アメリカやイギリスの特派員たちはギリシアの勝利を信じ、クレタの独立を祝福すべく、戦いの場となったギリシア本土に赴いたのであった。その中には有名なアメリカのレポーターである R. H. Davis とともにクレーンの姿があった。ギリシアの正義に共鳴し、情動的な加担をするように、アメリカの国民は固唾を呑んでその成り行きを見守っているのである。*Journal* としてはこの機を逃さず *Red Badge* の作者を派遣して彼に本物の戦争記事を書かせば、読者獲得の競争に多大の恩恵をもたらすと読みもあつたはずであった。クレーンはいわば Hearst を利用する形で、ひそかに伺った再度のキューバ行きの総ての計画を変更して (No.312) この機に乗じてギリシアに向かったのである。ギリシアでもキューバでも、行き先はどこでも良かった。とにかく大都会の暗黒街ではなく、本物の戦場における現実体験を求めていたのであった。

「*Journal* のためにギリシアに行く予定です。もし「そこで」*Red Badge* がつまらない作品と判ったなら文学市場における総ての権利は売り払って、オレンジの商売でも始めることになるでしょう」<sup>41)</sup>

今までの *Journal* の仕事とは違う、彼自身の文学の成就に向かう大きな目的遂行の仕事だったのである。

4月17日ギリシアに赴くと思われたクレーンの乗ったフランス汽船 *Guadiana* は、予定を変更して列強の艦隊に郵便物を届けるべくクレタ島の Suda Bay に直行することになった。そこから早速、湾内に集結した、英国、フランス、ロシア、ドイツなどの艦隊の緊迫した模様を伝える第1報が“*An Impression of the Concert*” (May 3, 1897)<sup>42)</sup> として送られている。続いて“*The Spirit of the Greek People; Athens, Greece, April 17*”, “*Stephen Crane Says Greek Cannot Be Curbed ; Athens, Greece, April 20*”においては、情報不足や赤痢罹病のためになかなか戦

闘の前線に遭遇出来ないクレーンが、生々しい戦場記録というよりも、トルコのクレタ支配とイスラムへの敵意で団結したキリスト教国の熱狂的な戦闘意識を、ギリシアの人々の戦場に赴く姿に重ねて、すでに“Death and the Child”<sup>34)</sup>のPezaの分身を胎内に身ごもったように、かなり感情移入気味に報告したものである。

“We must fight. There is nothing else to do.”

“We must fight. How can we do anything but to fight?... And it is better to be defeated than shamed.”<sup>40)</sup>

こうした記事の中からは各所に初めての従軍記者の気負いが見いだされるが、それはギリシア本土から遠く離れたアメリカの読者を生々しい戦闘現場に誘い、「セックスやスキャンダル」の記事と同様に、読者を異常な好奇心で引き付けなければならないセンセーショナルリズムの文体であった。

“Greek War Correspondents;Athens, Greece, May 1”においては、皆一様に自社の販売部数を増大させることが使命である131人の特派員に関する記事である。中でも英国と米国の記者の比較は興味深く、政治的な知識も背景もある英国の記者は権威のある記事を書けるのが当たり前で、それが出来ないアメリカの記者は、「灼熱の砂漠を、紛争の Armenia をくぐり抜け、Crete の反乱軍と生活を共にして」<sup>45)</sup>書いたもので、多くの外国人から国際的信用を勝る得るのはアメリカの記者だと自負している箇所がある。最終的には自分の戦争文学を樹立するための従軍であったとしても、ひとたびジャーナリストのペンを握ると、「現場主義」のアメリカン・ジャーナリスト気質が頭を上げて来るのである。

一時は己の戦争文学を検証する目的も忘れ、今か今かと実際の戦闘に遭遇出来るチャンスを伺っているのであった。

そして4月17日にアテネに着いたクレーンがVelestinoの激しい戦闘を生まれて初めて目撃することが出来たのは、やっと5月5日になってからの事であった。その高ぶる期待感のせいか、その描写は抑制を欠き随分と仰々しいものとなっている。

The roll of musketry was tremendous. From a distance it was like tearing of a cloth; nearer, it sounded like rain on a tin roof and close up it was just a long crash after crash. It was a beautiful sound-beautiful as I had never dreamed... the crash of it was ideal. (“Crane At Velestino;Athens, May10”<sup>46)</sup>

さすがに、遠くから見れば「実際には流された血も、兵士たちの表情も、恐怖も見えないで、それはまるでゲームのようである」、とそれが一面的なヴィジョンであると認識しているが、クレーンの中にはまだ現実の戦場体験による、真のリアリティのこもった描写は見えない。さながら未体験のまま書いた *Red Badge* の一場面を思わせるような文章である。

しかしVelestinoでの戦いはギリシア軍に取っては劣勢を強いられ、やがて敗戦の色が濃厚になって行くと、新聞用の過剰描写のクレーンの文体にも変化の兆しが見えて来る。5マイル離れた近くのVolosで目撃することになった、ギリシア兵や民衆の撤退していく悲惨極まりないその様子はいつの間にかクレーンをジャーナリストから文学者に変えて行く。クレーンはその現場報告“A Fragment Of Velestino (June3, 4, 5)”<sup>47)</sup>の中で揺るぎない戦記作家として成長していくのである。

Volosの港には小さな汽船が1隻停泊しているにすぎないが、そこに向かって敗走していくギリ

シア兵や、流民の様子はクレーンに人間存在の真実の姿を焼き付けた。虫歯の子供のように顎から頭全体を白い布で縛ってもらっている傷付いた兵士の姿もあった。砲弾のうち込まれる街角のモスクのそばの水のみ場では、飼い主を失った牛が一头砲火騒ぎも知らぬかのように水を飲み、その褐色の体が水面に写っている。小さなギリシア教会の建物の前では兵士が十字を切って神に祈りを捧げる。次の瞬間教会の建物は砲弾で根こそぎ崩れ落ちてしまう。

瓦礫のむこうには別の馬の死体が転がり、そばには真っ赤なポピーの花が、敗走する兵士の足にも踏まれずに咲き誇っている。一層むなししい人間の営みである戦争のさなか、遙か北方には頂に雪を戴いた Mount Olympos が聳えているが、誰もそれには気付かず、その「自然の美しい輝き」は人為の空しさを痛いほどに伝えてくる。

少しずつ戦場における人間の悲哀に心を染め始めるクレーンの目に一人の若い兵士の死に顔が焼き付く。それはアテネの町で見た、愛国の熱情に駆られた、いわばセンセーションナリズムの筆先から生まれた戦意高揚のなかの英雄的な兵士の姿ではなかった。トルコ軍の侵略の報に接し愛国の熱情に燃え立ち、兵役に志願した時から、この戦場で死に至るまでの兵士の姿に思いを致し、今はその死顔にはもはや「特に気高いものはなく」、詩人の心を掻き立てる「より深い感動」もない、平凡な一人の人間の死でしかない、と平板なリアリズムの文体に収められている。戦いが敗色を帯びるに連れて、ジャーナリストから小説家としての目がおのずと備わってきたものと言わねばならない。

*Commodore* 遭難事件で体験した不条理な人間存在の実感がさらに深く受けとめられていくクレーンにあっては、戦場における人為の空しさがジャーナリストである自らの存在にまでおよんだ感慨も生まれて来る。たとえ戦場で *Journal* の為の取材活動に明け暮れていても、他の特派員とは違ってクレーンの関心は常に己の文学につながっているのでもあった。

Velstino の現場におけるクレーンの取材の有り様を伝える記事<sup>48</sup>が、5月23日の *Journal* に報道されている。John Bass 記者は次々と砲弾のうち込まれる現場で、砲弾を装填し、発砲した装填する作業を行う砲手たちの作業を見ているクレーンに向かって、「今あなたの心にはどんなことが浮かんでいますか」と質問する。「お互いに撃ちあっている両軍の間であって、私の関心は兵士たちの精神的な状況です」とクレーンは答えた。これはさらに6月3, 4, 8日に互って掲載された“A Fragment of Velestino”の中でクレーン自身によってもう一度、「戦いの前戦であってどちらの側に凱歌が上がるか、そんなことは人間には分からない。しかし人々は新聞記者にその答えを求めて止まない。もし兵士たちの精神状況をなんとかして描きだそうとする時、そんなことを期待するなと何と馬鹿げた事であろう」<sup>49</sup>と書いている。これは Velestino の戦闘現場に駆け付けるのに後れを取り、それがライヴァルの Davis に非難されたことを意識していたのかもしれないが、ここにおいて、兵士の「精神状況」を把握することこそ自らの使命であるとするクレーンには、単なる戦争報道とはちがう別の目的があったことも確認出来る。Davis からは、歯痛に悩まされることなく、あの女「Cora」がいなければ現場には後れを取らず駆け付けることができ、最も激しい実戦を目撃出来たであろうに、<sup>50</sup>とまで言われたクレーンであった。Imogene Carter のペンネームで女性として最初の従軍記者としてクレーンの同行した問題の内縁の妻 Cora の存在はクレーンの私生活におけるスキャンダルの対象であった。この苦悩を抱えているクレーンはしかしながらそれによって、他の特派員とは違い、内的苦悩を抱えた文学者の視点が常に内在し、それがジャーナリストでありながら、言わば、はすに構えた視点を彼に与えた事にもなった。センセーションナリズムの呪縛から解かれて、より人間的な観点から新たな文学の世界観が自らの中にも生まれて来ると言えよう。

さらにこうした傾向は“‘The Blue Badge of Cowardice;Athens, May 11’”の記事に書かれた、Volos へ向って撤退する悲惨な民間避難民の姿に接することによって一層深まって行く。Volos へ退却した避難民は8,000人に及び、ありとあらゆる船舶を利用して避難する民間人の船上での疲れ切った様子や、700人の避難民が僅か6所帯の住む漁村に上陸避難する様は、「これも戦争の姿だが、我々が前線で見えたものとは違う又別の戦争の光景」<sup>51)</sup>としてとらえられている。ギリシャ人に幾ら感情移入した筆を走らせようと、所詮その勝敗の結果には利害を被ることのない無責任なジャーナリストの立場を更に越えさせる、言わば人間的な共感を根底にした文学的な視点が生まれて来る。

“My Talk with ‘Soldiers Six’ :Athens, June 1”においては、戦いを振り返って6人の兵卒にインタビューし、「あなたの将校は立派だったか?」「敗因は何だと思うか」「行進と実際の戦闘はどちらが辛かったか」などと質問をぶつけて、King, Crwon Prince, Smolenski のような国王や司令官ではなく、一兵卒から改めて「戦争」の内実を把握することに努め、その中では「砲弾の雨は怖かった、本当に怖かった」と *Red Badge* の Fleming を思わせるような現実の1兵卒の証言も得ることが出来た。“‘The Eastern Question’<sup>52)</sup>”では、ヨーロッパに於けるこの戦争の政治的、外交的背景に言及して、イギリスは目に見えないロシア軍の動きを、フランスはドイツの2枚舌を、ロシアはコンスタンチノーブル(トルコ)へのイギリスの影響力を、ドイツはフランスの野望を、それぞれ横に睨みながらの状況を捕らえて戦争を全体像として把握しようと努めている。

また“‘The Dogs Of War’”(May 30, 1897)においては、Velestino の激戦のあと町で拾われた小犬との交情を描いた一つの短編とも言うべき記事だが、“‘In the Depth of a Coal Mine’”や“‘An Omnibus Baby’”において行った、冷酷な資本家や荒み切ったスラム街の父親への怒りと同様に、このように動物にまで及ぶ人間の罪をクレーンはまた別の形で告発しているのだ。

この悲惨な戦いを目撃する経験の中でクレーンは、センセーショナルリズムを要求されるジャーナリズムに於ける自らの役割よりも、人間としての共感や感動の中で、あるいは戦争を取り巻く政治的、外交的、宗教的な背景にまで至る状況を把握し、そこから生まれて来る、真のジャーナリストの役割を改めて認識したことであろう。むしろセンセーショナルリズムの行使者としてのジャーナリストの仕事に限界を感じ、そこには第2の *Red Badge* への野望すら抱き始めていたのではないか。ギリシャ・トルコ戦争が休戦を迎えた後送った幾つかの記事は、センセーショナルリズムの呪縛を逃れるに十分なほどの硬質のものとなり、そこから新たに文学の世界での自己表現への強い欲求が生まれ始めたことも見逃せない事実である。

この仕事の後英国に滞在することになったクレーンが、RavensbrookでCora との新婚生活を共にしながら創作に専念する事になるが、ギリシア・トルコ戦争の従軍経験から書き上げた“‘Death and the Child’”は正にこのクレーンの内的成長を如実に物語るものと言えよう。

“‘Death and the Child’”(1897年1月脱稿)の主人公・Peza がジャーナリストの身分を捨て兵士として戦いの場に身を呈して行く行動のきっかけは、何よりも彼がイタリア育ちではあるが、ギリシャ人であったことである。しかし見逃してはならないことは、ギリシア本土に来て初めて、父の母国のためにペンを銃に持ち変えて戦いに参加しようとしたことである。

“I had no dream—I had no dream that it would be like this ! This is too cruel !  
Now I want to be a soldier. Now I want to fight. Now I want to do battle  
for the land of my fatherr.”<sup>53)</sup>

Pezaをイタリア生まれのギリシャ人と設定したのはその転身をより自然なものに見せる一つの虚

構であろうが、劣勢を強いられているこの悲惨な戦いを見て大きく気持ちが傾いた部分は、Volos での撤退を目撃したクレーン自身の現実体験と重なり合っているように思われる。生まれて初めて悲惨な戦争の現実に触れたクレーンが、もはや「傍観者」として報道に携わる自らの立場に多大の苦痛を覚えるようになっていたことは想像に難くない。長年ジャーナリズムにつかえて来た後に自己変革の時期を迎えていたと言えるかもしれない。

クレーン文学の展開という側面から見ても、*Red Badge* と “Death and the Child” を比較するとき、Henry が集団への復帰を目指して行く過程での戦争体験であるのに対して、Peza は戦友仲間からの離脱そして孤独の深層の中にはいっていく戦争体験<sup>54)</sup>であったという見解が一般的である。兵士となった Peza がたどる恐怖からの遁走はまた別問題として、「新聞記者」から「兵士」への願望には、人間的な共感に基づいた、ささやかではあるが「行動」への発動が見えているところとして注目してみたい。人間的営為への「参加」としてのこの兵士願望は、永年ジャーナリストを基盤として生活し続けて来たクレーンの閉塞状況を暗示し、自らの内部に起きたジャーナリズムへの離反の衝動と見ることも出来よう。やがて翌年の1898年7月クレーンはスペイン・アメリカ戦争の取材現場において Pulitzer と衝突を起こすことになるが、このギリシャでの転機は言わばその重大な伏線として見逃せない、クレーンのジャーナリズムとの確執のひとコマである。

同じくこのギリシャ取材を素材として書き上げたこの “Death and the Child” と *Active Service* は、元を正せばクレーンのセンセーショナルリズムへの反抗から結果として生まれたものである。それぞれ「兵士」として、あるいは「恋に殉ずる者」としての「傍観者」の立場を捨てた「行為する者」の物語であるが、クレーンは、この参加し、行動することへの衝動が、実はセンセーショナルリズムへの反動であることには気が付いていたかどうか。結果として *Active Service* を完成させることになった、スペイン・アメリカ戦争のキューバ体験はこの点からも究明されなければならない。(1990年9月29日)

## 注 釈

\* (日本英文学会第42回九州支部大会 (1989年10月28, 26日, 久留米大学) でのシンポジウム: 「アメリカ文学とジャーナリズム」において発表したものに加筆発展させたものである。)

1. Frank Luther Mott, *American Journalism* (The Macmillan Company, New York, 1968) p. 442.
2. John Tebbel, *The Compact History of The American Newspaper* (Hawthorn Books Inc. Publishers, New York, 1969) p. 202.
3. Thomas Beer, *Stephen Crane* (Garden, City Publishing Co., Inc., New York, 1923), R.W. Stallman, *Stephea Cvane* (George Braziller, New York, 1973) および, John Berryman, *Stephen Crane* (The World Publishing Compny, New York, 1962) を参照して作成したものである。
4. テキストは *The University of Virginia Edition of The Works of Stephen Crane, V III* (Charlottesville, 1973)。
5. 宮崎大学教育学部紀要; 人文科学第63号 (1988年3月)
6. *Stephen Crane, An Omnibus* (Alfred A. Knopf, 1970) p. 604. f. n.
7. *Virginia V*, p. lxxxvii.
8. Mottt. p. 436.
9. Stanley Wertheim and Paul Sorrentino ed. *The Correspondence of Stephen Crane* (Columbia University Press, New York, 1988) p. 48. f. n.
10. *Ibid.*, p. 50. 以下手紙は Wertheim の番号揭示のみとする。
11. *Omnibus*, p. 595.
12. *Correspondence*, p. 58.

13. *Arena*, IX (May, 1894)
14. *Cosmopolitan*, XXX (March, 1901)
15. Mott, p. 442.
16. *Virginia* VIII, p. 293.
17. Milne Holton, *Cylinder of Vision* (Louisiana State University Press, Baton Rouge, 1972)p.64.
18. *Omnibus*, p.655.
19. Beer, p. 205.
20. Alfred Kazin, *Starting Out in the Thirties* (Cornell University Press, Ithaca, 1989) p4.
21. ジャック・カポー「喪われた大草原」(寺門泰彦他訳, 太陽社, 1968), p.279.
22. *Virginia* VIII, p.293, Holton, p.69.
23. *Virginia* VIII, p.862.
25. Mott, p. 442.
26. *Virginia* VIII, p.605.
27. *Ibid.*, p.607
28. *Ibid.*, p.926.
30. 宮崎大学教育学部紀要; 人文科学第63号(1988年3月)
31. 場所は“the vast amusement area of the[New York]City lying roughly between Fifth and Ninth Avenues from Madison Square to 49th Street”で、かつて平穩無事の管轄区から回された警部の一人が言ったとされる次のような話に由来するとされる。  
 “For some time now I’ve had to be content with the cheaper cuts of meat, like round steak. From now on, I’m sure I’ll have a more generous diet of thick, juicy tenderloin.”  
 (*Correspondence*, p.222)
32. *Virginia* VIII, pp.366—367,
33. *New York Journal*, August 16..
34. “Literary agent”だろうが, Stallmanによっても不詳。
35. 26代大統領(1901-1909), この当時“Chairman of the Board of Police Commissioners”また, スペイン・アメリカ戦争では後述するようなクレーンとの因縁がある。
36. 宮崎大学教育学部紀要; 人文科学第65号(1989年3月)
37. Stallman, p.241.
38. Holtn, p.171.
39. 宮崎大学教育学部紀要; 人文科学第67号(1990年3月)
40. *Omnibus*, p.627.
41. Stallman, 260.
42. 初出は*Westminster Gazette*.
43. *The Open Boat and Other Tales of Adventure* (April, 1898) に収集。
44. *Virginia* IX, pp.13, 14.
45. *Ibid.*, p.18.
46. *Ibid.*, p.24.
47. 初出は*Westminster Gazette*, (June 3, 4, 8.)
48. Holton, p.175.
49. *Virginia* IX, p.37.
50. Stallman, p.280.
51. *Virginia* IX, p.47.
52. 未発表。テキストは*Virginia* IXによる。
53. *Virginia* V, p.123.
54. Holton, p.184.